

ウクライナの小児甲状腺癌

7月14日から25日までウクライナに行ってきました。州立小児病院や成人病院、内務省付属病院の他、チェルノブイリ省、保健省などの政府機関にも行き、現在の状態を伺いました。そして、もうじき10年目を迎えようとする原発事故の、人々に与える影響が次第にはっきりとその姿を現して来たことを実感しました。これから、そのいくつかを連載したいと思います。

まず始めは、小児甲状腺癌の増加です。事故直後に大量に放出されたヨウ素131と呼ばれる放射能は、成長期の子供達の甲状腺に蓄積しました。甲状腺がつくる成長ホルモンにはヨウ素が含まれており、放射性ヨウ素と区別出来ないからです。その結果、多くの子供達が甲状腺に異常を来しています。ウクライナ全体では汚染地域に55万人の子供達が住んでいます。私達が援助対象としているジトーミル州の保健大臣パラモノフさんによれば、同州には約40万人の子供がいますが、そのうち6万人が汚染地域にすみ15000人が甲状腺の異常を訴えています。

こうした甲状腺異常の子供達のうち、何人かが甲状腺癌になります。下に示した図は1986年に原発事故が発生し、その4年後からはっきりと子供の甲状腺癌が増えていることを示しています。事故前の8-10倍にもなります。

(河田昌東)

